保育現場におけるソーシャルワーク実践について

― 児童虐待対応を中心に、福祉行政報告例からの考察 ―

○　皇學館大学　灰谷 和代（8219）

キーワード：保育現場・ソーシャルワーク実践・児童虐待対応

１．研 究 目 的

保育現場では、日々の保育の中で、子どもや家庭の様子を知る機会が多い。児童相談所等の他機関では知り難い、保育現場だからこそ知り得る情報が保育現場には豊富にある。この保育現場の特性を活かして、従来の保育（ケアワーク）だけでなく相談援助活動（ソーシャルワーク）も、実践していくことが保育現場に求められている。本研究では、保育ソーシャルワーク実践の現状を、「福祉行政報告例」（厚生労働省）から分析し考察する。そして、より実用的な保育ソーシャルワークの実践モデル開発の「礎」を固めたい。

２．研究の視点および方法

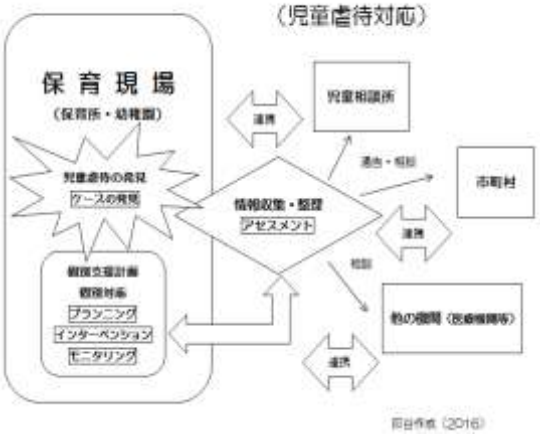
（１）保育現場におけるソーシャルワーク実践とは何か

保育現場におけるソーシャルワーク実践とは、保育現場で実践される相談援助活動のことである。保育現場の職員が、①子どもや家庭の変化・異変に気づく（ケースの発見）、②保育現場で情報収集と情報整理し、全体像を把握・判断する（アセスメント）、③必要な支援計画を立てる（プランニング）、④支援を実施する（介入：インターベンション）、⑤その後、支援の効果等を再確認（モニタリング）して、必要に応じて再計画して再実施する。保育現場での「支援が必要ない」と判断される（終結）まで、ソーシャルワークのプロセス、いわゆる PDCA サイクルが実施される。

（２）研究の方法

本研究では、保育現場におけるソーシャルワークの実践の状況を把握する方法として、「福祉行政報告例」（厚生労働省 http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/38-1.html）の報告データに着目した。そして、保育現場におけるソーシャルワーク実践のうち、本研究では「児童虐待対応」の活動のみに限定し、「保育所」と「幼稚園」を「保育現場」とした。また、保育現場での児童虐待を発見後、アセスメントした結果、児童相談所や市町村への相談・通告が必要と判断され、実際に相談・通告し、つないだケースを本研究対象の「ソーシャルワーク実践」とした。そして、対象活動に該当する報告データ、保育現場が経由されている児童虐待相談件数について分析し考察した。（図１参照）

図１：保育現場におけるソーシャルワーク実践
（児童虐待対応）



３．倫理的配慮

本研究では、厚生労働省がホームページ上で公開している報告データを基に分析する。調査の手順や内容については、日本社会福祉学会の「研究倫理指針」を遵守する。

４．研究結果

（１）児童虐待相談件数の全体像

平成 26 年（2015）度の福祉行政報告例の報告数値によると、全国児童相談所での児童虐待に関する相談件数は、88,931 件であった。このうち、被虐待者の年齢が 0 歳から 3 歳未満が 17,479 件、3 歳から学齢前が 21,186 件であり、乳幼児（0 歳～学齢前）が全体の 4 割を超えている。また、主たる虐待者は、実母が 466,624 件で全体の 5 割以上を占め、次いで実父が 30,646 件で全体の 3 割を占めている。このことから、依然、保育現場と関係性の高い年齢層とその保護者との組み合わせによる児童虐待相談が多いことが確認できる。

（２）保育現場が経由されている児童相談所への児童虐待相談件数

平成 26 年度、保育現場から児童相談所への児童虐待相談件数は 1,165 件であった。この児童虐待相談件数のうち、保育現場に所属している可能性が高い年齢層、0 歳から学齢前児童（乳幼児）が被虐待児となったケースが 38,665 件で、乳幼児虐待相談ケースの 3.1％が保育現場を経由されている。この割合は、過去 5 年間の中では最低値である。

（３）保育現場が経由されている市町村への児童虐待相談件数

平成 16 年からは、市町村が児童家庭相談の第一義的窓口となっている。そのため、保育現場から市町村への児童虐待相談件数についても、分析した。平成 26 年度の保育現場から市町村への児童相談件数は 7,288 件、乳幼児虐待ケース全体（43,526 件）の 16, 7％、こちらも過去 5 年間、相談全体からみた割合は最も低いが、相談件数は微増している。

（４）保育現場で発見された児童虐待種別

保育現場から児童相談所および市町村への児童虐待相談の虐待種別として最も多かったのは、身体的虐待である。次いでネグレクト、心理的虐待、性的虐待と続いた。

（５）その他

過去 5 年間の分析結果および分析結果の詳細については、当日、報告する。

５．考 察

本研究で対象としたソーシャルワーク実践は、支援を他機関へつなぐという点で重要なソーシャルワーク実践である。しかし、保育現場からの児童虐待相談は全体的に少なく、一般的にも根拠を示しやすい「身体的虐待」の相談が多かった。保育現場において本研究対象の「ソーシャルワーク実践」が活発であるとは言い難い。近年、保育現場では、待機児問題や保育士不足等の問題や課題が山積みされている。今後、保育現場に所属しないワーカーが、保育現場のソーシャルワークを担う日が来るかもしれない。それでも、日々の子どもの保育を担当する保育者が、子ども等にとって一番身近な存在であるという、その特性を活かした保育ソーシャルワークの実践モデルを開発していく必要はあるだろう。